「知性のヒト」か「欲望するヒト」か
—— 人類進化における欲望の役割 ——
ヘンリー・W・サリヴァン論文をめぐって

黒 石　晋

1. 緒 言

筆者は、ドゥルーズ＝ガタリの欲望論を参照しつつ、人間の〈欲望 desire〉に立脚した社会理論を追求してきた[1]。この場合の「欲望」という概念は、もともと〈欲求 need〉に立脚する旧来の社会理論の閉塞[2]を刷新するための対照的・代替的アイディアであって、新社会理論を構想し構築するための形式言語体系のひとつの項にすぎなかったのだが、そうした欲望の理論の出発点として筆者が措定し命名した「行為主体」が、まさしく〈欲望するヒト Homo desiderans〉だったのである（1997 年)[3]。

実は筆者は（少なくとも社会科学理論の領域において）この命名をひそかに「オリジナルな成果」と思っていた。だが最近（遅まきながら)、まさにこの語を明示的に採用し、しかもこれを〈知性のヒト Homo sapiens〉と対照的に論じている論文が、筆者の命名に先駆けて 1991 年に発表されていたことを知った[4]。

Henry W. Sullivan, "*Homo sapiens* or *Homo desiderans*: The Role of Desire in

---

1 この着想の初出は、山内康英との共著論文「システム理論と秩序の形成」『理論と方法』第 1 巻第 2 号、1987 年、42 頁である。その後拙著 『システム社会学』ハーベスト社、1991 年を経て、一応の成果といえるものが拙著『欲望するシステム』ミネルヴァ書房、2009 年である。

2 筆者のいう「旧来の社会理論」とは、たとえば富永健一 『社会学原理』岩波書店、1986 年、82 頁等にいう「社会学的行為理論」である。それは典型的には、「①欲求目的に対して、②それを充足する所与の行為の選択肢から、特定の行為を ③合理的に、④事前選択する」という「欲求の合理的充足」の理論、すなわち目的論的行為理論 (teleological action theory) である。この理論によると、「行為」とは、所与の目的の充足手段を、所与の選択肢から、事前選択するだけの営為になり、「新しい行為」(something new ; 後述の「4. 考察」を参照) を開拓する営みを包摂できない。そうした旧来の行為理論の閉塞については前掲拙著『欲望するシステム』第 2 章を参照されたい。

3 筆者にとっての、この命名の初出は、拙稿「欲望のエネルギー論（その 1）」『彦根論叢』第 306 号、1997 年、120 頁である。この名称については、なお前掲拙著『欲望するシステム』(前掲拙稿をその一部として包摂したもの)、5 頁、14 頁のほか、今田高俊らとの共編著『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房、2011 年、26-27 頁、橋本努編『現代の経済思想』勁草書房、2014 年、の第二章に所収の拙稿「欲望」、33 頁などを参照してほしい。これらの先行文献で当初、筆者は "homo desiderans"と頭小文字で表記していた。だが正式なリンネ流の命名法 (「二名法」: 属名に種小名を添える学名表示法) では、属名を頭大文字のラテン語主格で記すのがルールである (Homo が正しい)。ここに訂正したい。

4 その後の展開としては、2006 年にポーランドで「Homo desiderans」と題する映画が制作されているらしい (筆者未見)。さらに最近では、イタリアの心理学者 Sergio Salvatore が人間の本質を探る手掛かりとして「欲望」を置き、欲望するヒト Homo desiderans を Homo sapiens と対照的に論じることを試みている。「Homo desiderans」の概念は広がりつつあるようである。Sergio Salvatore (2015) "Cultural Psychology of Desire," Jaan Valsiner *et al.* eds., *Psychology as the Science of Human Being*, Springer. なおこの論文集は編者の一人として佐藤達也氏（立命館大学）が名を連ねている。

Human Evolution”

がそれである（以下これを「サリヴァン論文」と記述する）。

この論文は、精神分析の一派、ラカン派の論者による文学方面の言説であって、社会科学分野のものではない。今となっては新しい研究成果でもなく、ドゥルーズ＝ガタリの欲望論とも毛色の異なる論旨であるが、ともかく筆者に先立って“Homo desiderans”といっていた以上、参照・検討せねばならないだろうと考えた。

とはいえ筆者にとってラカン派の精神分析は明らかに専門外である。しかもラカンの思想はそれ自体が難解なことで知られている。サリヴァンのいう“Homo desiderans”の含意を知りたい一心でできる限りの読解の努力はしたものの、最終的な確信の心境にはなお遠い。ここに〈Working Paper〉という形で筆者の感想めいた私見を公開するのは、こうすることで研究者諸氏の眼に触れることがあれば、反応があるかもしれないと考えたからである。自身の浅学菲才を公表するようなもので忸怩たる思いはあるが、筆者が旧来親しんできた理論社会学との隔たりの大きさからすれば致し方ないことと判断した。

2. サリヴァン論文の位置づけ

出所と経緯

サリヴァン論文は、『ラカンと言語の主体』と題された論文集の第二章として発表されている。当該論文集の全体の構成は以下の通りである：

Lacan and the Subject of Language.

Edited by Ellie Ragland-Sullivan and Mark Bracher, Routledge, 1991[5].

Contents:

Acknowledgments

Introduction
Ellie Ragland-Sullivan

Lacan and the Subject of Language

1. Language: Much Ado About What?
Jacques-Alain Miller
2. *Homo sapiens* or *Homo desiderans*: The Role of Desire in Human Evolution
Henry W. Sullivan (pp. 36-48)
3. The Sexual Masquerade: A Lacanian Theory of Sexual Difference
Ellie Ragland-Sullivan

5 Routledge 社は、この書籍を 2015 年 12 月に再版している。その内容が現代においてなお価値を有すると判断されたということだろう。

Lacan and the Subject of Psychoanalysis

4. The Analytic Experience: Means, Ends, and Results
   Jacque-Alain Miller
5. Signifier, Object, and the Transference
   Russell Grigg
6. Theory and Practice in the Psychoanalytic Treatment of Psychosis
   Willy Apollon

Lacan and the Subject of Literature

7. Style is the Man Himself
   Judith Miller
8. Fictions
   Stuart Schneiderman
9. Where is Thy Sting? Some Reflections on the Wolf-Man
   Lila Kalinich
10. The Truth Arises from Misrecognition
    Slavoj Žižek
11. Literature as Symptom
    Colette Soler

巻頭の謝辞 Acknowledgments の中には、この論文集が 1988 年 5 月に米・オハイオ州ケントのケント州立大学で行われた「ラカン ; 言語と文学 (Lacan, Language and Literature)」と題するカンファレンスで発表された基調講演を編集したものだと述べられている。寄稿者の顔ぶれを見ると、ラカンの『セミネール』を編集・出版している直弟子で娘婿の Jacques-Alain Miller が 2 本の論文を寄せているほか、彼の妻 Judith Miller（つまりラカンの実娘）や、今日我が国でもよく知られるようになった Slavoj Žižek も寄稿している（ジジェクとドゥルーズ＝ガタリとの関係、特にガタリとの関係は微妙だが[6]）。Stuart Schneiderman は『ラカンの死』（誠信書房）などで日本にも紹介されている。

一方、当の著者 Henry W. Sullivan は、当時の肩書きが “Middlebush professor of Romance Languages, University of Missouri, Columbia” と記され、ロマンス語系の言語学ないし文学の研究者の地位を占めていたようである[7]。実際その後の執筆活動においても

6 ジジェクが、ドゥルーズ＝ガタリの主要概念「器官なき身体」を揶揄し、「身体なき器官」という自作概念をもって対抗していることは良く知られている。ジジェク（永原豊訳）『身体なき器官』河出書房新社、2004 年。ガタリは精神科医として当初ラカンのセミネールに出席していたらしい。それがのちに袂を分かったようで、このあたりの事情も両者間の関係に影を落としているかもしれない。

7 当該論文集の第 1 章冒頭で Jacque-Alain Miller が、H. Sullivan をスペイン語スペイン文学の教師と紹介している〔p. 21〕。なお、彼の肩書、“Middlebush professor” とは、正式名を “the Catherine Paine Middlebush Professorship of Romance Languages”という、女性人名にちなむミズーリ大学独自の名誉

文芸評論の方面をフィールドとしているようで、以下のような著作があるらしい（英語による単著に限る）。

Henry W. Sullivan (1996), *Grotesque Purgatory: A Study of Cervantes' Don Quixote, Part II.* Pennsylvania State University Press.

Henry W. Sullivan (1995), *The Beatles with Lacan: Rock 'N' Roll as Requiem for the Modern Age.* (Sociocriticism) Peter Lang Pub. Inc.

Henry W. Sullivan (1983), *Calderón in the German Lands and the Low Countries: His Reception and Influence, 1654-1980.* Cambridge University Press.

Henry W. Sullivan (1976), *Tirso de Molina & the Drama of the Counter Reformation.* Rodopi.

ラカンの知性が文学の方法論として広く援用されていることは周知の事実で（ラカンのセミネールに参加していたという Julia Kristeva らが有名だ）、今回の論文集もその方面でテーマが設定されたものであろう。

サリヴァン論文の邦訳

筆者は、ともかくもサリヴァン論文を全訳した。その訳業をここに合わせて公表できれば理想的なのだが、昨今、著作物に関する権利関係の事情は厳しさを増すばかりである。当のサリヴァンのみならず出版社の意向もクリヤせねばならぬ由、今回、全訳の公表は差し控えることにした。幸運にも本稿を読んでいただいた読者から要望があれば、そのつど個別に対処することとしたいので筆者までお問合せいただきたい。

3. 解 題

サリヴァン論文は、緒言に述べたように、精神分析の一派、ラカン派の論考である。中世思想を準備した古代のアウグスティヌスや近代思想を先がけたデカルトに比肩させ、ラカン思想を“ポストモダンのエピステーメー”と称賛しつつ、ラカニアンの〈欲望〉概念をベースに、ラカニアンの論理を援用し、ラカニアンならではの論旨を展開している。

筆者が感じた本論文の長所・短所は、このアプローチそのものに由来する表裏一体のものである。長所として、その結論はラカン派だからこそ到達しえた新地平を示している。だがだからこそ逆に、短所としてラカン派（あるいは少なくともその独自の論理を理解する者）にしか訴えかけられない論旨になっており、非ラカン派の人にとっては肝心の到達点が地平線の向こうに隠れて見えない、という結果になっていると思われる。そして現状、ラカン派の論理は万人向けのものとは言い切れないだろう。

称号を授与された功労者のようである。

〈欲望〉の理解について、筆者の立場とラカン派の立場とでは、基本的・最終的に異なっているといわねばならない[8]。筆者はドゥルーズ＝ガタリに依拠しているから、むしろアンチなのかもしれない[9]（そして社会学者として精神分析に最終的関心を持つものでもない）。が、それでも重要なところで微妙に符合する論点が存在するようだ、というのが現在の感想である。特に、ラカン派バリバリのサリヴァン論文が筆者の考えと共通しているのは、ニュアンスの差はあれ、ヒトはその〈欲望〉において「自分の欲しいものが自分でもわからない」という一点に集約される（そこが既知のものの「獲得」である〈欲求〉との違いであり、もっとも大切な認識である）。この一点を中心として、サリヴァン論文と共闘できそうな半径・輪郭を思いつくままに記すことにしたい。

失われた環：ミッシング・リンク

原著者サリヴァンは、冒頭でこう宣言する：「わたしは、… 言語の起源という厄介な問題に取り組むことにした。これはヒトの起源とも不可分でもある」と[10]。「霊長類からヒトへの進化」という問題は、人間の永遠の課題といってよいだろう。従来、形質人類学者や古生物学者、社会生物学者らがこの問題に取り組んできた。

だがサリヴァンは、ラカン派として、ヒトの起源という問題の「失われた環」は生物学の中にではなく、「人間言語 Human Language」の中にある、と主張する。彼にとって、ヒトの起源に対する生物学からのアプローチは、脳の容量や構造の進化の推定など、どうあがいても外的な必要条件の解明にとどまるらしい。そうして言語の検討に依拠すべしと主張する彼は、動物の用いる「記号システム Sign Systems」や「霊長類の発声 Primate Vocalization」を精査し、これらは言語の「十全たる言語 a language」たるべき必要条件にすぎないと結論する。では言語の必要十分となる条件は何なのか。サリヴァンによれば、先行するこうした必要諸条件に加えられるべき、言語が人間言語たりうるための十分条件こそ、ラカンのいう〈欲望 desire〉だというのである。それゆえ、人間言語の探求は、先史時代のホモ属にラカニアンの考える〈欲望〉が認められるか、という欲望の「存否」の問題になり、それが彼らの残した洞窟絵画や打製石器の中に探求されることになる。これがサリヴァン論文の大まかなシナリオである。欲望が存在したならば、ホモ・サピエンスの存在が確証されるというわけだ。「知性のヒト *Homo sapiens* が存在する以前に、欲望するヒト *Homo desiderans* が存在していなくてはならないのである[11]」、という彼の表現は、

8 ラカン派は欲望を欠如（社会学的には欠乏）との関係で規定するが、筆者は基本的にその立場をとらない。筆者は、欲望の作用は「欠乏－充足」をめざすことではなく「発出－付加」をめざすことだと考えているのである（拙稿「欲望・貨幣・商品・商人」『彦根論叢』No. 394、2012 年、208-210 頁）。この点で筆者の考える「欲望」とラカン＝サリヴァンのいう「欲望」とは逆のベクトルを指し示している。筆者にとって、人類の文化・文明は欲望の「欠乏－充足」の所産ではなく、欲望の「発出－付加」が社会的に蓄積したものだということになる。

9 彼らの『アンチ・オイディプス』という書名は精神分析への「アンチ」を表明している。

10 サリヴァン原論文、p. 36。

11 サリヴァン原論文、p. 44。

このロジックを明示している。

ヒトの黎明

一方、筆者は、〈欲望 desire〉に基づく社会理論を本格的に構想した旧著の中で次のように記していた：

> …〈欲望〉は人間に固有な現象である。かかる〈欲望〉をキー概念として社会分析のベースに置く利点は、これにもとづいて分析装置をつくることができれば、それは人類史をその黎明から現代に至るまで連綿と貫く一般的通用性を持つはずだ、という点である。欲望こそ、人間という種族（“Homo desiderans”）を貫く基準だからである。つまり、欲望の理論は社会の一般分析枠となる[12]。
>
> 〔拙著『欲望するシステム』、33 頁。傍点は本稿での引用時のもの〕

と。この論旨はサリヴァン論文と一致していた。それゆえはなはだ僭越ながら、この筆者の引用文の文脈に引き寄せて解釈することが許されるなら、今回参照・検討したサリヴァン論文こそ、まさに「欲望するヒト」の人類史上の「黎明 dawn[13]」に位置づけられる論文だったのだ、ということになる。

空虚 the void とは

さて、サリヴァン論文が「欲望」の存否を探る上でキーワードとしているのは、〈空虚 the void〉あるいは〈モノ the Thing〉という明らかにラカニアンの独自概念であって、これだけでも強烈にラカン派の言説であることを主張している。〈モノ〉の概念は、ラカン派で端的に「知りえないモノ」のあらわれとして用いられる語である。そしてそれへの探求心こそが人間の「欲望」とされるのである[14]。

伊藤正博氏（大阪芸術大学）は、ラカンの〈空虚 le vide〉あるいは〈モノ la Chose〉について、有名な RSI シェマ[15]にもとづいて解説している。長くなるが、この難解な概念を手際よく解説していると考えられるので、以下に引用する。

> … ラカンにあっては、フロイトにおける外的現実と心的現実との二元論は、現実界、想像界、象徴界という三つの次元の間の関係へと置き換えられる。これら三つの次元

12 その事実上の初出は、注 3 にも記した通り、当該拙著の元となった拙稿「欲望のエネルギー論（その 1）」『彦根論叢』第 306 号、1997 年、125 頁である。引用にあたり homo を Homo に訂正した。

13 サリヴァン論文では、上部旧石器時代（the Upper Paleolithic）を「歴史の黎明 the dawn of history」と表現している。サリヴァン原論文、p. 41。

14 ラカンの〈欲望 désir〉概念の形成には、A. コジェーヴによるヘーゲル解釈の影響が指摘されており、そのことがフロイトの原語とされる Wunsch（ファンタスム的「願望」の意味が強い）とのニュアンスの違いを生む一因になっているように思われる。コジェーヴの〈欲望〉および〈欲求〉の概念、そして「人間的か動物的か」という問題は筆者にとっても興味あるところだが、ここではこれ以上深入りしない。

15 現実界（R）、象徴界（S）、想像界（I）からなるラカンの三元論。フロイトの二元論に、ソシュールのシニフィアン（象徴界）が加わって構成されたラカン独自の三元論シェマである。

は、三つ巴に絡み合って「ボロメオの結び目」のようなトポロジー的構造を形成していると言われる。その構造を、わたしたちの日常生活に即して「物語」的に説明すれば、次のようになる。すなわち、わたしたちが言語的秩序の下に参入するとともに、現実界は諸シニフィアンの対立から成る世界（象徴界）へと変換される。そしてそれとともに、象徴界の秩序に準拠しつつ、自我を中心として組織された具体的な表象の世界（想像界）が、日常的な意味での現実性を形づくる。その結果、現実界はいわばヴェールに覆われ、わたしたちから隔てられる。しかし、わたしたちは諸シニフィアンの対立構造の中に決して完全には組み込まれず、したがってまた、自我のイメージによっては決して完全には汲み尽くされない。そこにはつねに残余がある。この残余には、「わたしがわたしである」ために切り捨て、わたしの与り知らぬものにした一切のものが含まれている。この残余は象徴化不可能なもの、つまり、それと「知る」ことのできないものだが、象徴界の中に一種の空虚を持ち込むという仕方で出現する。そしてこの空虚をめぐって、人生の苦労が始まる。三つの次元は概ね以上のように絡み合って、わたしたちの日常生活の舞台を形成している。

ところで、ラカンは象徴界に出現する空虚を、1960 年のセミネールで「もの（das Ding, la Chose)」と呼んでいる。「もの」という言い方からも分かるように、ここでは物自体（Ding an sich）をめぐるカントの議論との類似性が意識されている。ただし「もの」は、物自体（現実界に対応）というよりも、むしろ超越論的対象（transzendentaler Gegenstand）に近い。超越論的対象は、いわば対象の列に並べという無理難題を押し付けられた物自体が不承不承、悟性の前に差し出した空虚だといえるだろう。同じようにラカンは「もの」に対して、「シニフィアンによって被害を蒙った、原初的現実に属するもの」という定義を与えている。「もの」は、一方から見れば、象徴界に空虚として出現した現実界に属するものであるが、他方から見れば、現実界へと通じる象徴界の裂け目である。だが、わたしたちがこの裂け目から現実界を覗き見ようとすると、すかさず想像界がわたしたちの視野をさえぎりにやって来る（昇華はこのメカニズムに従う)。つまり、現実界、想像界、象徴界という三つの領域が重なり合うボロメオの結び目の中心に「もの」は位置するのである。　〔伊藤正博、1998 年、傍点は引用者[16]〕

確かに〈モノ the Thing／la Chose／das Ding〉という抽象名詞[17]は個別具体的な存在を超

16 伊藤正博「昇華と倫理」『大阪芸術大学紀要』(21)、1998 年。ネット上に公開されている以下の URL：http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/research/laboratory/bulletin/pdf/kiyou21/ kiyou21_09.pdf を参照した。当該資料にはページ番号が打たれていないが、該当の箇所は論文の 8~9 頁目にあたる部分である。

17 このサリヴァンの the Thing は、もともとフロイトの das Ding をラカンが la Chose (大文字の〈モノ〉) として展開したラカン派の概念であり、それが英語に渡ったものである。フロイトの das Ding の概念の形成にはカントやハイデッガーらの知性が関わっており、それだけでも一筋縄ではゆかないが、さらにラカンの la Chose は、向井雅明によると、中期ラカンにおいてプラトンの「アガルマ」を経てラカン独自の〈対象 *a*〉へ進展していく（向井『ラカン入門』ちくま学芸文庫、2016 年、292-3 頁、308 頁、322-6 頁、338-9 頁、および新宮一成『ラカンの精神分析』講談社、1995 年、233 頁以下を参照)。こうして〈対

えた高度の認知対象をあらわしていて、逆にいえば〈具体的なもの〉を何も表していない[18]。だからこそ現実界の〈モノ〉は象徴界の〈空虚〉であって、逆に、そこから本来見えない現実界を垣間見たのが〈モノ〉なのである。だがそれは永遠に到達できない「見果てぬ〈モノ〉」である。このような、永遠に失われた「見果てぬ〈モノ〉」を追求する奮闘がラカニアンのいう〈欲望〉なのである。欲望による、そのような「文化の奮闘 effort」（昇華と呼ばれる）をサリヴァンは先史時代の洞窟絵画（や打製石器）に見出そうとする。

サリヴァン論文によれば、ヨーロッパの洞窟絵画群（29,000B.C.頃に出現）に描かれた動物種の分布は、フランスのルロワ＝グーラン（A. Leroi-Gourhan）の構造主義的解釈学によって体系的に分析されている。グーランは 65 以上の洞窟について、描かれた動物のうちで優に半分を超えるのが馬とバイソンであること、しかもその出現頻度と空間的分布からすべての動物が A 群（馬など）と B 群（バイソンなど）に区分できることを発見した。さらにグーランによるとこの二群は人間の性的差異、すなわち男性と女性に一致するといい、B 群の動物たち（バイソンほか、女性）は洞窟の中心部に規則的に見出される一方、A 群（馬ほか、男性）は残りのエリアにのみ見出されるのだという。これらの絵画が何を表現しようと意図されたのかは実際には分からない（洞窟絵画を描いた旧石器人にすら、分からないのだろう）。しかし、見果てぬ〈モノ〉を表現しようとする奮闘の努力であることは確かだ、とサリヴァンは見るのである。

こうしてサリヴァンは先史時代のホモ属にラカニアンの〈欲望〉の存在を確信し（すなわちそれは “Homo desiderans” である）、それゆえにまた、そこに人間言語の存在を確信したのである。

4. 考　察

さて、ここからはもっぱら筆者の立場からする多少発展的な考察である。もともと筆者は、筆者なりに「欲望の社会システム学」を構想した際 —— 社会理論（特に社会システム理論）が通常そうであるように ——、精神分析という重厚な知性を前提に置いたわけではなかった。ただ、既存の社会学的行為理論を刷新するためにドゥルーズ＝ガタリを参照したことで、それを介して精神分析へ（批判的に）多少触れざるをえなくなった、という程度の意識だったのである。だが結果として感じたのは、社会学的行為理論を構想する上でも、人間の行為の意味の理解（M. ウェーバー）をはじめ、思いのほか精神分析の研究成果との接点はあるようだ、ということである。テクニカルな（いわば「理系的」な）社会

象 *a*〉はもはやフロイトからの借用ではなくラカンのオリジナルになり(向井、前掲書 323 頁)、彼の思考の最重要概念を占めるに至るのである。なお「アガルマ」は 1961 年 2 月のセミネールで展開されている（ミレール編、ラカン『転移』上、岩波書店、209 頁以下)。

18〈モノ das Ding／la Chose〉から発展したラカンの〈対象 *a*〉が「対象性をもたない」ことについては向井、同上書、324 頁。

理論から出発し[19]多くその世界に親しんできた筆者は、自身これまでそれを十分意識してこなかったが、特に今回のラカン＝サリヴァンの〈モノ la Chose／the Thing〉、および〈転移 transfert／transference〉についてはその感が強い。

thing と something

というのもまず、筆者は旧論で〈モノ thing／chose／Ding〉よりもむしろ〈何か something／quelque chose／etwas〉という語の持つ語感を重視し、これを〈欲望するヒト Homo desiderans〉の起源に置いてみていたからである[20]（これは特に精神分析を意識したものではなかった）。それは〈何か〉という感覚を持ったことこそが「ヒト」という種の決定的特性なのだ、とする仮説構成であり、そのような「ヒト」こそが筆者にとって事実上 Homo desiderans と等価だったのである。「何かが欲しい、しかしそれが何なのか分からない」という未分化な心理こそ、欲望のエネルギーを表すものだからである。

そして現時点において、筆者は、その〈何か〉は、社会理論上 ①something unknown、②something else[21]、③something new、という三つの様態をとると考えている[22]。これらを強烈に志向する、人間の心的エネルギーが筆者の考える〈欲望 desire〉である。

だがこうした一連の〈何か〉の定式化は実際、フロイト＝ラカン系の精神分析、特に彼らのいう〈モノ〉に近い考えではなかったのだろうか[23]。〈モノ〉を希求することが欲望の作用なのだ、という彼らの考えに近いのではないだろうか。

ただし強調しなければならないのは、フロイト＝ラカンの〈モノ thing／chose／Ding〉と筆者の〈何か something／quelque chose／etwas〉との決定的な違いは、〈モノ〉が「到達不可能な欠如」として否定的・消極的なニュアンスを与えられ、それへの欲望はせいぜい部分的な充足（昇華）にとどまるのに対して、〈何か something〉の方は「結構重要な何

19 たとえばサイバネティックなシステム、シナジェティックなシステムなどの社会理論への応用である。前掲の山内康英との共著論文「システム理論と秩序の形成」『理論と方法』、1987 年を参照されたい。

20 拙稿「欲望・貨幣・商品・商人」『彦根論叢』No. 394、2012 年、211-2 頁を見られたい。筆者の場合、ヒトの起源に欲望を置くことの真意は、それをヒトの精神の起源として「証明すべし」という遡及的位置付けではなく、それを作業仮説として置いた場合、「その後に構築された社会理論が成功すればそれでよし」という後続的位置づけである。「作業仮説」については前掲の共編著『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房、2011 年、27 頁の筆者の発言を参照されたい。

21 ①を 2009 年の拙著の時点では “something unspecified” と表現していた。前掲『欲望するシステム』、5 頁。また、同書 29 頁では ①を「欲望の原初形態」、②を「欲望の転移形態」と表現していた。欲望の「転移」については後述。

22 ①②については前掲拙稿「欲望・貨幣・商品・商人」 (2012)、211-2 頁、③については拙稿「欲望」〔橋本努編『現代の経済思想』勁草書房、2014 年〕、41 頁に既出。①something unknown は未分化な欲望の対象としての原初的な「何か」であり、②something else は貨幣（に類するもの）を欲望することによって欲望される、貨幣以外の「何か」であり、③something new は新規の開拓・開発を志向する欲望の対象としての「何か」であって、たとえば未知の新しい技術革新への欲望である。欲望が貨幣へいわば「転移」することによって、ヒトの社会への接点が生じ、その欲望の流れが社会のシステムを編制するというのが筆者の理論の骨子である。

23 ただしこれらの something は、本文で直後に述べるように、筆者にとって決して空虚な〈欠乏〉(thing) ではなく、存在感のある〈付加〉(something) である。ここがラカニアンと筆者の最大の相違点である。

か[24]」として肯定的なニュアンスを持つことである。このことが〈何か〉に対して〈欠乏〉よりも積極的な〈付加〉の意義を与えるのである[25]。

欲望の転移と貨幣

さて、上記した“something”に関しては、社会学理論を目指す者として、特に“something else”についてさらに検討しなければならない[26]。というのは、これによって「欲望するヒト」が社会との接点をもつからである。さらにいえば、それによって社会システムが形成されるからである。特に経済の領域でいえば、“something unknown”を欲望するヒトは、何を欲望すべきか分からないからこそ貨幣を欲望し、欲望を貨幣に託して[27]、それを通じて“something else”を（貨幣以外の何かを）欲望する。ここに「欲望の何か別の対象」として、「社会という貨幣／貨幣という社会」(社会貨幣／貨幣社会）が立ち現れて来[28]、他者との間に貨幣的交換関係が営まれるからである。

ところで、精神分析で〈転移 transference／transfert／Übertragung〉と呼ばれる現象がある[29]。サリヴァン論文において〈知っていると想定された主体 *le sujet supposé savoir*〉と表現されているラカン派の概念[30]は、これに強く関連する。これは自分の知らないものを知っていると想定され、それゆえに欲望を転移される主体のことである。具体的には、患者にとっての医者がそれにあたる。

ここで筆者は社会科学理論を志向する学徒として、どうしてもこの欲望の「転移」を「貨幣」（あるいは「権力」）に適用してみたいという欲望にかられる。ヒトは知らない何かを欲望する[31]ゆえに、貨幣へ（あるいは権力へ）欲望をいわば“転移する[32]”のである（そし

---

24 “He is something.”との表現は、彼が「空虚な人物」ではなく「存在感のある重要な人物」であることを示す。

25 前出脚注の 8 を参照されたい。

26 英語の something else は、仏語では autre chose となる。autre も chose もラカニアンにとって「欲望の対象」の位置に置かれるべき語ではなかったか。

27 ドゥルーズ＝ガタリの用語法では、〈登録 recording／enregistrement〉という語で「欲望の託し」を表現する。

28 Societal Money／Monetary Society : それは、社会が保証する貨幣であり、かつ同時に、貨幣に商品多様性を保証する社会である。「商品多様性」については前掲拙稿「欲望・貨幣・商品・商人」2012 年、217 頁「選択権、選択能」の項目および 219 頁「商品化」の項目を参照。

29 精神分析の臨床では、「患者が過去の人間関係とその感情を治療者との間に再現すること」である。

30 サリヴァン原論文、p. 43。なおその含意については前掲の向井雅明『ラカン入門』2016 年、350 頁などを参照。

31 ここでいう欲望はもちろん、欲望全般ではなく「貨幣的欲望」と呼ばれるべき、ある種の「物的欲望」である。ヒトの欲望にはさまざまな種類があるが、筆者が社会科学分野で特に重要と考えるのは「貨幣的欲望」と「権力的欲望」である。権力的欲望については、ドゥルーズ＝ガタリが「ナチズム」を欲望した人々を W. ライヒに立脚して論じている。『アンチ・オイディプス』市倉訳 44 頁。

32 これを先には「欲望を貨幣に託す」、と表現した（上記脚注 27 を参照)。欲望の貨幣への「転移」という表現は拙著『欲望するシステム』2009 年、137 頁の注 (26) に既出である。ただしそこでは（欲望の貨幣への)「転移」を比喩的に指摘しているものの、それ以上踏み込んではいない。そもそも精神分析の流儀でいえば、欲望の「転移」という概念を人格のない貨幣に用いるなど荒唐無稽な暴挙であって到底

てそれは “something else” を志向せんがために、である)、と。このとき貨幣は単なる物体ではなく、貨幣社会が体現した「社会そのもの」であって、社会が集団的に信用しているものであり、かつ社会が貨幣に対して多様な商品（商品多様性）を保証しているものである。ここで貨幣は〈*le sujet supposé savoir*〉という「主体」(それはすなわち「貨幣社会そのもの」である）に変容していて、ヒトが貨幣を「信用する」ことは当該貨幣社会を「信用する」ことに等しい。このとき経済学的「信用」はまさに精神分析的「転移」と同等の性質を帯びているのである。

筆者はかつて、以下のように記したことがある：

> 「欲望→貨幣」の関係においては、貨幣は欲望の客体であるが、「貨幣→商品」の関係においては、貨幣は欲望の代理主体である。

と[33]。ここでいう貨幣という「代理主体」(英語ならばさしずめ representative subject であろう）こそが〈*le sujet supposé savoir*〉に相当していたことになる[34]。

欲望の貨幣への転移と貨幣愛

〈転移〉は、しばしば愛情に似た感情を伴うといわれる（転移性恋愛)。これは転移の感情的な副産物にすぎないのだが、貨幣においても、実のところこの感情は案外見捨てられない。貨幣愛というと倒錯的な「富への物神崇拝」が想起されるかもしれず、それは貴金属鋳貨の時代には正しいのだが、今日の、原則として国家単位の、管理通貨制度のもとでは意味合いが異なってくる。国別に発行される中央銀行券という紙切れは、国民に愛されているから個々人にも愛されているにすぎないある種の象徴だからである[35]。

これについては旧ソ連崩壊後の独立諸国を思い浮かべるとよい。西欧で多大な努力を払ってユーロによる「通貨統合」が目指されていたまさに同じ時期に、ソ連の崩壊後にはあっという間にルーブルによる「通貨統合」が崩れ去ったのである。ロシア以外の諸国にとって、なぜ「ルーブル」では駄目だったのか。ソ連の崩壊後、たとえばウクライナ人は、

受け入れられまい。転移を受ける側の貨幣には人格がないではないか、と。転移はあくまで臨床における医師と患者の関係を指す用語であり、貨幣への欲望などはせいぜい欲望の fetishism にすぎないと見られよう（筆者は貨幣を単なるモノとは考えていないが)。筆者はそうした謗りを覚悟する。だからこれはあくまで社会科学への「比喩的転用」なのだと考えていただいて構わない。あるいは社会科学の側からする、独自の用法なのだと思っていただければそれもよい。

33 前掲拙稿「欲望・貨幣・商品・商人」2012 年、216 頁の「貨幣」の項目を参照いただきたい。

34 貨幣という代理主体は、私に代わって「何を知っている」のだろうか。それは、私の知らない、私の欲しい「貨幣以外の何か」であり、最終的にはその貨幣社会が保証する「商品多様性」に含まれる「何か」である。

35 ここでいう「国民」という抽象的な人格は、その国の個々人にとって一般化された、想像界に属する「他者」であり、だとすればラカンのいう〈大文字の他者 l'Autre, Le grand Autre〉に比定できるものなのかもしれない。しかも貨幣とは、その「国民」が信用する（欲望する、欲望を転移する)、象徴界に属するものである。そしてラカンはいう、「無意識の欲望とは(大文字の)他者の欲望である」と。Jacques Lacan, « La direction de la cure », dans *Écrits*, Paris, Le Seuil, 1966, p. 632.『エクリ』第 3 巻、弘文堂、1981 年、68 頁。

もはや「ルーブル」が表徴する社会貨幣／貨幣社会（それはすでに「ロシア」を象徴する社会貨幣／貨幣社会に変容した）に欲望を転移できなくなった（愛情を持てない、信用できない）のである。そして彼らは「ウクライナ」を象徴する新たな社会貨幣／貨幣社会「＝グリブニャ」（ウクライナ通貨）を復活創造し、そこへ欲望を転移する道を選んだ。ここには「国家愛」というべき一蓮托生の心理が含意されている[36]。それは欲望をつぎ込みうる（転移しうる）表徴を通じて何かほかのものを希求する、欲望の一般的な特性のひとつの（そして重大な）あらわれだったのである。

5. おわりに

今回サリヴァン論文を邦訳し検討する中で痛感したのは、今更ながら、異なる「言語圏」でのそれぞれの言語活動であり、その中で縦横無尽に展開していたラカンの思想である。特に今回は、独語圏で精神科の治療行為から誕生した精神分析が、仏語圏でソシュール言語学を吸収して独自の発展をなし、それをサリヴァンが英語圏で文学の方法論として展開した成果を、日本語圏で一社会学者があわよくば社会学の方法論として参照しようとしている[37]わけだ。そのつど最適の原語文献に立ち返ってニュアンスのずれを微修正する努力がなされるとはいえ、そこには複写を繰り返すことによる像の変容の類がどうしても避けられない。言語や文化による趣味や流儀の違いもある[38]。

だが筆者にとってはこの事情が利点といえなくもない。実のところ筆者の大目標は「欲望による精神分析」ではなく「欲望による社会理論」の構築なのであって、その目的のためには「欲望概念の諸相」に多くの情報を詰め込むことはできない。諸概念が重すぎて社会の分析がフリーズしてしまっては無意味なのである。経済学の「効用」概念が無内容な最小の概念になっているのもそのためで、むしろ出発点として最小で的確な欲望概念になっている方が望ましい。そういう目で見ると、どんな言語圏でも間違いなく核心に置かれ

---

36 逆に、チャウシェスク政権末期のルーマニア（1989 年頃）では、深刻なモノ不足の中で自国通貨「レイ」が信用を失墜し、市井の人々すら闇ドルを欲望した。レイを持っていても、買えるものがない（当該社会に商品多様性がない）のである。しかしこのとき同時に地下経済には多様なモノが流れ、闇ドルでなら半ば堂々と多様な商品を購入できた。自国通貨に欲望を転移（託すことが）できないこうした国民の不幸は深いものであった（筆者の実体験による）。

37 〈欲望 desire〉の概念も、言語圏によってかなりのニュアンスの違いを生じているように思われる（以下注 38 をも参照）。サリヴァン論文で重要概念とされている〈モノ das Ding／la Chose／the Thing〉などもその典型といえよう。

38 仏語圏の精神分析界で広く用いられている基本語の désir（ラカンの最重要語のひとつでもある）にしても、フロイトによる独語の原表記は Wunsch であり、英語圏ではこれがもっとも近い同根の wish として受け入れられている。これはファンタスムの世界の願望と解釈されることが多い。『アンチ・オイディプス』での désir はファンタスムの世界から離れて「現実の世界での生産のエネルギー」の意味になり、その英訳版ではこのニュアンスゆえにか wish ではなく desire となったのだが、独訳版ではフロイトに回帰して Wunsch となっている。こうした事情は日本語圏ではなかなか調整しにくいものである。

る本質的な意味さえ参照されればいいのであって、そのためには言語圏によって解釈がずれているような個所は切り落とす姿勢をとってよいことになるからだ。